

# 基礎学習支援における協同学習を取り入れた「学習コミュニティ」の構築

鮫島輝美（京都光華女子大学）

キーワード：基礎学習支援、協同学習、拡張的学習、学習コミュニティ

**【背景】**初年次教育の必要性が叫ばれ始めたのは、大学進学者の「多様化」や、高校から大学への円滑な移行が難しいという現象が見られるようになったからである。大学進学者の「多様化」とは、少子化・ゆとり教育を社会的背景とした、「学力低下」「学習習慣が十分に身に付いていない」、「学習目的が明確でない」「学習意欲が低い」といった問題を指している(濱名, 2008)。現在、多くの大学生に、初年次教育の必要は明確だが、前述した学生側の問題点だけに目を奪われれば、個別の能力(学力)のみを問題としてしまい、学生の成長の可能性を排除してしまう危険性がある。また、初年次教育が「学習スキル」の習得だけを意味することの問題点も指摘されている(絹川, 2007)。

本校でも、基礎学力・学習意欲の低下、という傾向が見られており、多様な学力を有する学生一人一人に適した高品質な学びを提供する必要に迫られている。このように「激しく変化する社会における大学機能の再構築」(文部科学省, 2012)に迫られる中、「学修時間の飛躍的増加と、それを支える学修環境の整備」「学生の【主体的な学び】を拡大する教育方法の革新」が推奨され、「ラーニングコモンズ」の構築が話題となった。「ラーニングコモンズ」という表現は、主に①図書館機能の新展開②アクティブラーニングを促進する学修環境③コミュニケーションスペースの新展開、という3つの文脈に整理する事ができる(中沢他, 2013)。

本学でも、こうした背景を受け、学修環境としてのラーニングコモンズの整備を行ってきた。そして、2014年度から、図書館の整備、学科別コモンズの整備、学習ステーションの開設、を行った。特に「学習ステーション」は、③コミュニケーションスペースとして位置づけ、常駐の学習支援教員(2014年度1名、2015年度2名)を配置するとともに、学習アドバイザー(教員兼務、3名)を配置し、学習時間の増加と学習方法の学習支援、基礎学力支援、に対し様々な試みを実践してきた。

**【目的】**本発表では、2014年度の学習ステーションでの取り組みを紹介し、学習支援教員・学習アドバイザーがどのように「学習コミュニティ」をデザインし、構築してきたのか、また学生たちはどのように変化したのかについて、理論的に考察することを目的とする。

**【方法】**「学習コミュニティ」デザインにあたり、学習理論として、協同学習における協同の精神(安永, 2012)を基盤とした実践知アプローチ(香川, 2011)を採用し、最終的には能動的学習者(アクティブラーナー)の育成を目標としている。このように学習論の視点を、「教師がどのように指導するのか」という視点から「学習者の視点」へと転換することで、学生の能力低下や教員の能力格差を問題とするのではなく、「諸主体」が、既存の集合体(活動システム)のあり方、あるいは複数の活動システムの間関係性を質的に変化・転換させていく、新しいタイプの拡張的学習が可能と

なると考えた。学習コミュニティデザイン(青山学院大学, 2013)とは、協同性の高い学習を、学習環境づくりと学習共同体づくりを通して、自発的で発見的な「学び合い」ができる実践共同体をデザインしていくことである。その実践共同体の基盤を協同学習とし、自ら学習過程に深く関与しながら、学習仲間との学び合いを大切に、能動的かつ積極的に学び合い、仲間と自分の変化成長をともに喜び合える学習支援を目指した。

**【結果】**学習支援教員・学習アドバイザーが行った支援のうち、今回紹介するのは、特に発表者が関わった①学習習慣の確立のための支援、②学習方法の学習支援、③能動的学習グループ支援、のケースである。①では、学習習慣がついていない学生に対し、My プロジェクトシート(別紙)を使用させ、学習計画を立て、それを見守るという体制を採用した。その結果、定期的に学習ステーションで自習する姿が伺え、定期試験まで継続し、単位を取得する事ができた。②生理学や病理学(理系科目)の学習方法がわからない学生に対し、定期的に集まり、一緒に問題を解き、わからない箇所を教科書や参考書を用いて調べる勉強会を行った。結果、学習方法がわからなかった学生が自分なりの方法を見つけ、自立して学習できるようになった。③範囲の広い科目に対し、どこから手をつけてよいかわからない学生を集めて、一緒に復習する場をもうけた。結果、わからない単語をどこで調べ、内容確認をどの教科書や参考書を用いたらよいかイメージする事ができ、最終的には、学生同士で教え合い、励まし合い、助け合うグループがいくつか立ち上がった。そのグループ学習は現在も継続している。

**【考察】**学習ステーションに支援を求めてくる学生の多くは、「何をどこから手をつけてよいかわからない。」という。このような学生に高校までの勉強方法を尋ねると、授業中は黒板を映せば、「ノート」が完成し、テスト勉強は、試験前に出された復習プリントをやっておく(または、丸暗記をする)ことで、単位を取得してきた。そのため、大学の授業において、多量のテキストの要点さえもまとめる事が難しい。このような学生にいくら「予習復習しなさい。」と指導したとしても一人では具体的方法のイメージ化ができない。学習ステーションでの試みは、個別のスマールステップの目標を定め、常に教員が承認を与え、励まし、継続する事で、自主性を醸成してゆく試みであった。小さな成功体験を積み重ねる事が、「これなら自分にもできる。」という自信につながり、自立した学習行動へと変容していくこと明らかになった。

・青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター。「学習コミュニティデザイン」。

<http://www.hirc.aoyama.ac.jp/project/prj01.html> (2013年10月14日閲覧)

・濱名篤(2008). 初年次教育の必要性と可能性, 大学と学生, 5, 6-15.

・香川秀太(2011). 実践知と形式知, 単一状況と複数状況, 分析と介入, そして質と量との越境的対話-状況論・活動理論における看護研究に着目して, 質的心理学フォーラム, Vol.3, 62-72.

・絹川正吉(2007). 学士課程教育における初年次教育, カレッジマネジメント, 145, Jul-Aug, 22-25.

・文部科学省(2012). 大学改革実行プラン-社会の変革のエンジンとなる大学づくり-

・中沢正江他(2013). 主体的に学び、学び続ける活力を得られる学習場, 高等教育フォーラム, 3, pp.65-80.

・安永悟(2012). 活動性を高める授業づくり-協同学習のすすめ-, 医学書院.